

第一回ピース登山隊・富士登山顛末記

— 2002年7月12～14日 —

取材&文&写真: 水谷 俊樹 (ピース登山隊隊長)



「富士山だけはわからないんだよ」
「富士登山」当日——バスの運転手さんは、参加者たちの荷物をトランクに積み込んだ後、そう言いながら運転席に乗り込んだ。

●「富士登山」当日

7月13日、朝起きて、歯を磨こうと野外炊事場に向かう途中、目の前に富士山が飛び込んできた。

頂上付近には、まだ雪が白く残っていることが確認できた。

「おはよう！ 富士山が見えるよ！」

すれ違う参加者たちに挨拶。眠そうに目をこすりながらテントから出てくる人もいれば、すでに登山の荷造りを終え、準備体操をしている人もいた。

「大丈夫かな？」

歯を磨いていると、横にいた参加者の一人にそう聞かれた。

「何が？」

「去年も登ったけど、天気が悪くて八合目までしか行けませんでした」

午前6時、富士山の麓、静岡県御殿場

市にある国立中央青年の家を出発。

富士登山でよく利用される登山口は、富士宮口、須走口、河口湖口、御殿場口、吉田口の五つ。そのなかでも、富士宮口は、昔から表口登山道として利用されてきた。

「初めて富士山に登る」という参加者が多いことも配慮され、バスで行くと一番高度を稼ぐことのできる富士宮口を選んだ。目的は、参加者全員が、日本の象徴『富士山』の頂上に立つことである。

五合目に向かうバスの中、緊張しているせいか、口数は少ない。うっすらと窓が雪っていく。高度が上がり、バスの中と外に温度差がある証拠だった。

季節は夏、富士山周辺の平地で30度を超える日であっても、新五合目では16度。気温は100メートル高くなるごとに0.6度下がるという。目指す山頂は7度くらい、真冬の東京並の寒さだ。

窓を開けると、ひんやりとした冷たい風を感じることができた。Tシャツの上にもう一枚トレーナーを着る。

「いよいよだ」

念願の富士登山を目の前に、参加者はざわざわと落ち着かない様子。ゆっくりとカーブを曲がるバスとは対照的に、一気に緊張は高まる。

「登山途中のトイレはどうなっているのですか？」

と質問された。事前に調べておいたはずの資料が見つからない。運転手さんに聞けばわかると思い、運転席の横に行つた。その時である。

——フロントガラスが濡れていた。

「雨」

誰かがそう言うと、参加者のほぼ全員が窓の外に目を向けた。

「せっかく日本に来ただんだから、世界的に有名な富士山に登りたい」



Love and Peace ~風化することのない記憶を胸に~

世界の平和を願いながら日本のシンボル「富士山」へ



母国を離れ日本で生活する外国人から、このような話をよく聞いた。もしかすると、彼らにとって「富士山」は、日本人以上に特別な存在なのかもしれない。

「いろんな人に話を聞いたけど、富士山に登るということは、想像するより大変なことらしいですね」

事前に行われた実行委員会の打ち合わせでのこと、韓国大学生のシンさんの言葉が脳裏をよぎる。

●富士宮登山口に到着

午前7時、富士宮登山口に到着。雨は一向に止む気配はない。やがて、雨は激しくなり、雷が鳴り出した。そして、次第に参加者たちの話題は、期待から不安へと変わっていった。

現地集合となっていたインストラクターと合流。その指示により、バスの中で待機することになった。

バスの外で、実行委員会のスタッフとインストラクターが打ち合わせをする。

「登れるか？ 登れないか？」

雨は降り続き、吐く息は白い。バスの中は、冷房から暖房へと変わった。

「せっかくここまで来たのに……」

あちこちから、声が聞こえる。しかし、窓の外に目を向けると、諦めざるをえない状況だった。



そして……。
「とりあえず、行けるところまで……」約一時間後、それぞれが用意した雨合羽を着てバスの外に出た。無情にも雨は止むことはなかった。各班に分かれ、担当のインストラクターから諸注意を聞く。

ピース登山隊実行委員会の事前の打ち合わせでは、NPO法人・富士山クラブ「トイレ净化プロジェクト2002」～生命の水、運搬ボランティア～にも、参加することになっていた。

この企画は、登山者が集中する7月～8月、富士山頂にあるトイレが水不足で処理能力が低下するため、リュックの空いている隙間に、水の入ったペットボトルを押し込んで運ぶという、市民ボランティアである。

今回、引率をしてくれたインストラクターの中には、その富士山クラブの人たちもいた。そして、「少しだけでも、富士山の土を踏ませてあげたい」

参加者の声に耳を傾け、そう言ってくれた。

しかし、たとえ登ったとしても、初めから頂上に辿りつける可能性は限りなくゼロに近かったといえる。なぜなら、参加者の鞄の中にあったペットボトルは、すべて五合目に置いていくことになったからだ。

山の天気は変わりやすいという。

「もしかすると……」